

# 『断腸亭日乗』と江戸浅草

所 由美\*

(e-mail : yumitokoro@yahoo.co.jp)

## < 목 차 >

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1. はじめに      | 4. 荷風の浅草 |
| 2. 先行研究と問題提起 | 5. 終わりに  |
| 3. 江戸の香り     |          |

キーワード：日記(Diary), 幻影(Vision), 江戸(Edo), 浅草(Asakusa), 探墓(Intention to visit a grave)

## 1. はじめに

『断腸亭日乗』(後は『日乗』と称する)は、永井荷風が満37歳の時から79歳で急逝する前日まで、40年以上にわたり綴った日記である。「断腸亭」という名前の由来は、荷風がこの日記を書き始めた時期に市ヶ谷牛込余丁町(現在の新宿区余丁町)に住み、庭に植えた秋海棠の別名である断腸花に因んで「断腸亭」と号したからであった。

『日乗』には、天候、来訪者、食事、散策先の風景など、多岐にわたる記述が時にはスケッチなども交え丹念に綴られている。東京の様々な様子が描かれており、中でも浅草は、晩年の荷風をして「浅草の人達は亮舜の民の如し。」「余が老懷を慰るところ今は東京市中此の浅草あるのみ。」と言わしめるほど、荷風にとって思い入れの強い場所である。

従って本稿では、こうした江戸情緒の色濃く残る浅草を深く懐かしんだ荷風の足跡を踏まえ、『日乗』において江戸と浅草が如何なる意味を持つものであったのかを考察していきたい。

\* 公州大学校 日本語講師 日本文学専攻。

## 2. 先行研究と問題提起

臼井吉見は『日乗』について、藤原定家の日記『明月記』に匹敵するもので、わが国日記の最高峰をいくものと非常に高い評価を与えている。奥野信太郎は、荷風の日記は一種の隠棲日記であり、自然風物日記であると共に篤学読書人の読書日記であると述べ、生松敬三は、第一に花鳥風月についての記載、第二に世相万般に対する反発と批判、第三に女達の記事を『日乗』の「鼎の脚」と定めた。飯島耕一は「照魔鏡」「全体日記」などといった文言を使って、『日乗』が社会・人生上の諸現象を描叙したことを指摘している<sup>1)</sup>。

以上のように『日乗』は、大正昭和時代の最高水準の社会風俗史としてのみならず、芸術的価値の高い文学作品であることは専門家の一致した評価であり、先行研究では、文学や世相の面から、或いは江戸の趣を残す風土の散策、軍国主義への反抗などの見地からアプローチされているものが多い。

戦後、中央公論社や岩波書店より荷風全集が刊行され、『日乗』の全貌が明るみに出て以来、質量共に類稀な日記に対して様々な解釈が加えられてきた。中でも、多年荷風文学に親しく接してきた奥野信太郎、中村真一郎、遠藤周作、河盛好蔵、鮎川信夫、吉田精一、宮城遥郎念どの多くの評論家や研究者は、殆ど異口同音に、日記の中の荷風と実在の荷風との間に距離を置き、この膨大な日記を総じて公開を念頭に置いた一種のフィクショナルな性格を持つものと見ている。

それは『日乗』の内容ばかりでなく、成立過程においても複雑な様相が絡んでいるからである。『日乗』には実はいくつかの異本があり、岩波書店版『荷風全集』(1964)に収められた『日乗』は、遺品として残されていた浄書本『日乗』の翻刻であって、荷風は生前、この浄書本を更に修正した形で日記の大半を公表している<sup>2)</sup>。

但し、岩波版『日乗』、つまり現存する浄書本も、荷風が毎日書き継いだ日記そのものではないとも言われている。戦後公刊された中央公論版の『日乗』は、岩波版浄書本(副本)に手を入れたものであり、その異同は、大野茂男による両者を対照した表によって一目瞭然に見比べることができる<sup>3)</sup>。

1) 塚本康彦(1989)「『断腸亭日乗』における反体制的言辞」中央大学文学部紀要(130), 中央大学文学編, p.67.

2) 柳沢孝子(1996)「永井荷風『断腸亭日乗』」国文学 解釈と教材の研究 41(2), 学灯社, pp.66-67.

3) 大野茂男(1971)「断腸亭日乗研究(資料編)」千葉大学教養部研究報告 A 4, 千葉大学編, pp.95-161.

柳沢孝子によれば、恐らく始めにノート<sup>4)</sup>か何かに書き記された日々の日記があって、やがて荷風はそれらを雁皮紙に墨字で浄書(和綴製本)し、そのためにわざわざ作った帙(ちつ)に収めた。この5枚27冊(1945・10・31まで)と、浄書未製本分(1947・1・14まで)、及びその後大学ノートなどに書かれたものが岩波版『日乗』の全てであるが、これらの浄書本がいつ作られたのかもよく把握できておらず、浄書本のあちこちに、後の書き入れと見られる朱筆や墨字による加筆訂正なども随所に認められる<sup>5)</sup>。

何れにせよ、荷風は『日乗』の大半を公表したわけであるが、公表分にも浄書本からの修正が認められ、大野茂男の言葉を借りれば、「筆者の思想感情のあらわな伝達を避けるためとか、他人のプライバシーを傷つけまいとする常識的な配慮が働いたことによる省略・変化がほとんど」という。

そもそも公表を意図して書く日記というものが持つ問題、即ち『日乗』が「創作」か否かという点について、「創作」説をとる遠藤周作はこう語っている。

荷風もまた彼の読者のために、読者がおそらく望むような、期待するような毎日を『日乗』のなかで送ってみせる。そして読者は創られた主人公と荷風とを混同し、同一視してそこに段像をつくるのだ。それを荷風はちゃんと計算している。だからこそ『断腸亭自乗』は日記ではなく日記文学なのである。(「『荷風ふし』について」<sup>6)</sup>)

対して大野茂男は、「たとえ虚構や歪曲があったにせよ、荷風の伝記資料として最重要のものであることもまちがいはない。他の荷風作品や、友人知己による文章や談話が、これ以上の価値をもつとは言い得ないのである」と述べ、赤瀬雅子も「『断腸亭日乗』はあくまで文学作品としての日誌である。」とその創作性を踏まえた上で、しかしそれが目指す目的性については「芭蕉の『おくのほそ道』と同じように、芸術的完成度をを目指すための虚構もあり、それによって事実以上の事実に向おうとしている。」<sup>7)</sup>と肯定的に評価している。

4) 各冊の表紙および各年の冒頭には『断腸亭日記』と記されることが多い。各検の題策には『断腸亭日乗』とある。  
5) 例えば荷風は、1938(昭和13)年に至って、知人の平井程一に「日記筆写副本」の作成を依頼している(6月11・22日)。翌1939(昭和14)年10月29日には「昭和七年までの日記は去年平井君其副本をつくり呉れたれば其後をうつし置かむと思へるなり」の記があり、以後は自ら副本作りに励んでいるようだが、1943(昭和18)年に、浄書された日記を収めるための帙が作られる。詳細な『荷風日記研究』(1976.3, 笠間書院)の著者の大野茂男は、この「副本」が現存の浄書本『断腸亭日乗』であろうと推測しているが、実物を目にする機会がないのでこの1932(昭和7)年までのものが平井の筆跡であるかどうかは断言できない。

6) 遠藤周作(1985)「『荷風ふし』について」『新潮日本文学アルバム 永井荷風』(23) 新潮社, p.26.

7) 赤瀬雅子(1992)「荷風の批判精神—『断腸亭日乗』にみる韓国観を中心として」総合研究所紀要 18(1), 桃山学院大学紀要, p.24.

### 3. 江戸の香り

荷風には墓参を趣味とする探墓癖、即ち展墓趣味があった。荷風の「礫川徜徉記」の中には「探墓の興」は江戸時代からあったとする次のような興味深い記述がある。

掃墓の間事業は江戸風雅の遺習なり。英米の如き実業功利の国にこの趣味存せず。たまたまわれ巴里にありて之有るを見しかど、既に二十年前のことなれば、大乱以後の巴里の人士今猶然るや否や知るべくもあらず。江戸時代に在りて普く探墓の興を世の人に知らしめし好奇の士は、江戸名家墓所一覽の一書を著せし老樗軒の主人を以てまづはその鼻祖ともなすべきにや。墓所一覽の梨棗に上せられしは文政紀元の春なること人の知るところなり<sup>8)</sup>

『日乗』に初めて現れる墓参は、1914(大正3)年1月2日に62歳で死去した父永井久一郎に対してである。毎年荷風は欠かさず父の命日に墓参し続けた<sup>9)</sup>。1929(昭和4)年1月2日には、「午下寒風を冒して雑司ヶ谷墓地に往き先考<sup>10)</sup>の墓を拝す」という記述もある。50歳を過ぎ健康も損ねていた荷風が、正月の父親の墓参だけは決して欠かさなかった。1922(大正11)年7月9日に鷗外が死去した後は、向島の弘福寺にあった鷗外の墓(関東大震災後、三鷹の禅林寺に移転)もよく訪ねるようになる<sup>11)</sup>。

その他にも『日乗』には墓参の様子が随所に描かれている。1922(大正11)年9月2日には尾崎紅葉<sup>12)</sup>の墓を訪ね、続いて鶴屋南北の墓を訪れる<sup>13)</sup>。市川左団次が南北の「謎

8) 近代に入ってからの「墓所一覽」では、1940(昭和15)年刊、藤浪和子著『東京掃苔録』がよく知られているが、この復刻版(八木書店、1973年)の序文で、森銑三は、老樗軒について次のように記している。「江戸時代の後期に、老樗軒という崎人が出て、普ねく諸名家の墓を探して廻り、さして墓所一覽の一書を著した。それよりして老樗軒の後を追ふ熱心家が相ついで現れ、明治には探墓を目的とする会も出来、和紙の機関誌なども出た」明治時代に早くも探墓を目的とする会が出来、機関誌まで出ていたというのは面白い。『日乗』1923(大正12)年1月11日の記述はその意味で目をひく。「南葵文庫にて探墓会編纂の墓掲余志を見る。編者は大江丸田竹といふ俳諧師なり」探墓に興味を持った荷風は、南葵文庫に足を運び「探墓会」の会誌を読んでいる。

9) 1918(大正7)年1月2日「蟠梅の花を裁り、雑司ヶ谷に往き、先考の墓前に供ふ」  
1919(大正8)年1月3日「快晴稽暖なり。午後雑司ヶ谷に往き先考の墓を拝す」  
1922(大正11)年1月2日「タキシ自動車を雑司ヶ谷墓地に走らせ先考の墓を拝す」  
1924(大正13)年1月2日「晴れて好き日なり。お栄を伴ひ先考の墓を拝す」  
1926(大正15)年1月1日「昼舗の後、霊南阪下より自動車を買ひ雑司ヶ谷墓地に往きて先考の墓を拝す」

10) 「先考」とは「亡き父」、「先妣」とは「亡き母」という意味である。

11) 1924(大正13)年2月16日「弘福寺に往き、鷗外先生の墓を拝す。」、1927(昭和2)年7月9日「午後銀座太牙に立寄り、自動車にて選上弘福寺に赴き森先生の墓を掃ふ。」

12) この日の『日乗』には以下のように書かれている。「曇りて風涼し。午後青山墓地を歩み紅葉山人の墓を展

帯一寸徳兵衛(なぞのおびちよととくべえ)」を上演することになったのを受けての墓参である14)。

このように墓参は荷風の密やかな趣味であり、江戸時代の漢詩人、館柳湾や大沼枕山、或いは母方の祖父にあたる儒者鷺津毅堂、更に小泉八雲、森鷗外、上田敏といった明治の文学者たちの墓を訪ね歩いた。荷風のこのような探墓趣味は、一体どこから来たのであろうか。

1924(大正13)年の随筆「礪川徜徉記」では、荷風は次のように語っている。

何事にも倦果てたりしわが身の、猶折節にいさゝかの興を催すことあるは、町中の寺を過る折からふと思出でゝ、其庭に入り、古墳の苔を掃つて、見ざりし世の人を憶ふ時なり

雨の夜のさびしさに書を読み、書中の人を思ひ、風静なる日其墳墓をたづねて更に其為人を憶ふ。此心何事にも喩へがたし

そもそも荷風は、パリ遊学時にもモーパッサンやゾラの墓を訪ねていた。1908(明治41)年、パリから友人の西村渚山に送った手紙の中で、「モーパッサンの墓は、書生町からは程遠からぬ巴里の南端、モンパルナツスの墓地にある。二三日前に参詣した。又其の記念碑は、巴里の貴族、富豪町の公園モンソーの池のほりにある」と言い、とりわけ自身の墓参癖について、「巴里見物で一番趣味のあるのは墓地の散歩」と言い切った。モンマルトルの墓地に行った時、「カツフェーで出会った女郎」が、親切に案内してくれ、『椿姫』の墓に共に参詣した奇談を演じたと言っている。『椿姫』の墓と同じ墓地内には、著者のデューマフィースの墓があるし、ゾラもあり、又ハイネもあり、ドーデとゴンクールは西部の墓地(ラ、シエーズの墓地)にあると披露している15)。

---

す。墓石の傍に三尺ばかりなる見影石の円柱あり。死なば秋露のひぬ間ぞおもしろきといふ山人が辞世の句を刻したり」と言う。尾崎紅葉については、『日乗』1917(大正)6年12月21日に、いま一度ゆつくりと味わいたい本として、森鷗外「即興詩人」、泉鏡花「照葉狂言」、成島柳北「柳橋新誌」、一葉全集などとともに、紅葉「二人妻」を挙げている。

13) 大正11年9月15日「松延小山内の二子と車を与にして深川万年町心行寺に赴き、鶴屋南北の墓を掃ふ。明治座出勤の俳優作者皆参集す」。

14) 文人の墓への散策はこの後頻繁に行なわれた。1922(大正11)年9月17日、「午後雑司ヶ谷墓地を歩み小泉八雲の墓を掃ふ。」1922(大正12)年8月19日、「午後谷中瑞輪寺に赴き、枕山の墓を展す。天竜寺とは墓地裏合せなれば、毅堂先生の室佐藤氏の墓を掃ひ、更に天王寺墓地に至り鷺津先生及外祖母の墓を拝し、日暮家に帰る。」同年8月24日、「午後三田聖阪上薬王寺に赴き、枕山の父大沼竹溪及大沼氏累代の墓を展す。墓誌を写しみる中腺雨灑来る。」1923(大正13)年2月11日、「電車にて牛込横寺町二十二番地長源寺に至り、館柳湾の墓を展す。」

15) だが、カフェーで知り合った娼婦の案内で、モンマルトルの墓地にある「椿姫」のモデル、即ちアルフォンシー

尚、探墓をはじめとする荷風のノスタルジー志向は、帰朝後の1911(明治44)年に書かれた随筆「靈廟」にもはっきりと表れ、「徳川家の墓所である芝の増上寺に心惹かれ」た荷風は、「自分の生きつゝある時代に対して絶望と憤怒とを感ずるに従つて、ますます深く松の木蔭に声もなく居眠つてゐる過去の殿堂を崇拜せねばならぬ」と述べている。

荷風の探墓癖はこうした懐古趣味から来る当然の帰結である。だが、荷風は「仮探の夢」1946(昭和21)年で、神社には全然興味がなく、「わたくしには縁もゆかりもない処」と言った。文人風の禅味を覚えさせる風致が神社の境内にはないというのがその理由である。

荷風の探墓行脚が特に頻繁になるのは関東大震災の後で、特に震災翌年の1924(大正)13年はよく墓歩きをしている<sup>16)</sup>。前年の1923(大正13)年、森鷗外の「洪江抽斎」「伊沢蘭軒」などの史伝を読み、その影響で自分も江戸文人の史伝を書こうと思いついたからであり、それは1925(大正15)年刊「下谷叢話」となって結実している<sup>17)</sup>。

#### 4. 荷風の浅草

東京の下町を愛した荷風は、「すみだ川」1909(明治42)年などで明治末期の浅草を描いたが、震災前の浅草にはそうは足を運んでいない。1920(大正9)年9月22日に、流行の安来節<sup>18)</sup>を一度聞いてみようと思いつき浅草に出かけているのと、1922(大正11)年2月9

又・プレススの墓に参詣するなど余りにも話がうまく出来すぎていて、この部分は荷風の創作ではないかと言われている。

16) 1月4日、本村町曹溪寺に藤森天山の墓。1月5日、葉王寺に大沼竹溪の墓。2月11日、牛込長源寺に館柳湾の墓。2月14日、牛込光照寺に鈴木自藤父子の墓。3月12日、北品川正徳寺に南園上人の墓。4月7日、日暮里経王寺に森春涛の墓。4月20日、原町本念寺に大田南畝の墓。そして7月9日の鷗外の命日には、向島弘福寺へ。

17) 和田英信(2015)「永井荷風と『下谷叢話』」お茶の水大学中国文学会報(34)、お茶の水大学中国文学会編、p.24.1922(大正11)年7月9日、鷗外が亡くなるとその全集の編纂に荷風も与ることとなり、翌1923(大正12)年5月17日夜、配本された鷗外全集所収の作品を順次読み進めるうち、『洪江抽斎』と出会ってたちまち魅了された荷風は興奮を次のように記している。「夜森先生の洪江抽斎伝を読み覚えず深更に至る。先生の文この伝記に至り更に一新機軸を出せるものゝ如し。叙事細密、気魄雄勁なるのみに非らず、文致高遠蒼古にして一字一句含蓄の味あり。言文一致の文体もこゝに至つて品致自ら具備し、始めて古文と韻頡頏することを得べし」。尚、『下谷叢話』の命名は、外祖父である鷲津毅堂が1871(明治4)年、下谷竹町(台東区台東2丁目)に構えた居にちなむ。なお大沼枕山も1849(嘉永2)年、下谷御徒町(台東区上野6丁目)に居を構えた。何れも現在の、いわゆるアメ横に近い場所である。

18) 荷風はこの日の『日乗』で安木節について以下のように述べている。「九穂致軒の二子と浅草公園に安木節を聴く。近頃市中の寄席また吉原など、到るところ安木節大に流行すと聞きしが、吾等一たびも耳にせし事なきを以

日に、市川段四郎の告別式<sup>19)</sup>で浅草に出向いている程度である。

震災後の浅草が活気を取り戻すのは、榎本健一、エノケンがカジノ・フォーリーで人気者になる1929(昭和4)年頃からである<sup>20)</sup>。

荷風が以前、この時期に浅草に行かなかった理由について、川本三郎は、「浅草が荷風にとって「下町」「江戸情趣を残す古い町」というより、今をときめく盛り場、にぎやかな興行街に見えたからだろう。現在の浅草からは想像しにくい、震災前の浅草は、東京一の繁華街である。たとえば当時、映画の封切館(いまでいえばロードショー館)は浅草にかなかった。だから、映画評論家の飯島正が回想記『ぼくの明治・大正・昭和』(青蛙房、1990)で書いているように、当時の若い「活動狂」は新しい外国映画を見るために、浅草通いをした。ちょうどいま私たちが新作をロードショーで見るために銀座や新宿、渋谷に行くのと同じである。『日乗』の中で、浅草は長いあいだ大きな役割を与えられていない。たまに浅草公園に出かけたり、酉の市に出かけたりしている程度である。」と述べた<sup>21)</sup>。

今西英造は、荷風が大正初期頃から、「西洋かぶれ」の日本人に反発するかのようには江戸回顧に耽溺していったが<sup>22)</sup>、それに応じ、都心部から急速に変わりつつある江東地区の下町への愛着が強くなったと述べている。神社や寺、江戸の場末の面影を残す町などが散在していたからであり、結局は消閑の場所として山手育ちの彼の心に住みついたのは、銀座や新宿ではなく下町情緒豊かな浅草であり、『溼東綺譚』が生まれたのも江東玉の井の私娼窟からであると述べている<sup>23)</sup>。

て此夜浅草まで出向きなり。近在百姓の盆踊と浪花節とを混じたるやうなものなり。」

19) このことは『日乗』に、「市川段四郎去る六日の夜享年六十八歳を以て歿す。この日浅草千束町宅にて告別式を行ふ。立春以来天気日、暖にして頭痛を催すほどなり。吊問の帰途浅草公園を歩み吾妻橋より船に乗り永代橋に至る。隅田川も兩岸の景旧観を存する処稀にして、今は唯工場の間を流るる溝渠に過ぎず。風月堂にて夕餉をなし楽天居句会に赴く。」とある。

20) 川本三郎(1996)『荷風と東京〈下〉—『断腸亭日乗』私註』都市出版、p.194。「浅草に部屋を借りて、「浅草紅団」を書いた川端康成や、同じように浅草に部屋を借りて「如何なる星の下に」を書いた高見順と対照的である。」「エドワード・サイデンステツカーが言うように「もし永井荷風から何を連想するかと聞かれれば、たいいの人は浅草と答えるのではあるまいか。しかし戦前、荷風が作品を書きつづけていた時代には、彼にとって浅草はそれほど重要な町ではなかった。少なくとも、作品に描くべきほど大事な土地ではなかった」。

21) 川本前掲『荷風と東京〈下〉—『断腸亭日乗』私註』p.195。

22) 田村隆一(1974)「『断腸亭日乗』と日本の近代化」現代詩手帖17(6)、思潮社、pp.35-36。荷風の江戸趣味について、「(荷風は)胃腸が弱いからおかゆみたいなのを食べながら、旧市内の、江戸が残っているようなところをスタスタ歩く。結局過去に会いに行くんでしょけど、彼の場合過去というのは文化のかたちを残している過去で(中略)江戸文化が生み出した一つの形を持っている過去です。だから彼が過去を訪ねるというのは、一つの文化体験としての旅なんですよ」と述べている。

23) 今西英造(2002)「『断腸亭日乗』を読む (三)荷風と「時代」」史(109)、現代史懇話会編、pp.31-32。「「変わる新宿あの武蔵野の月もデパートの屋根に出る」(「東京行進曲」1929(昭和4)・6ビクター)、「は」と「も」では全く意味がちがう。作詞の西条八十は「月は」ではなくて「月も」として、たくみに新宿の急

1931(昭和6)年12月11日には、「晡時中洲病院に往く、日未没せざるに淡烟模糊、市街を籠め、灯火既に燦然たり、新大橋より乗合汽船に乗り吾妻橋に至る、花川戸の岸に松屋呉服店<sup>24)</sup>の建物屹立せり、橋際に地下鉄道の降口あり、市街の光景全く一変したり」と書き残しているが、「乗合汽船」とは今で言う「水上バス」のことである。当時の運賃が一銭だったことから「一銭蒸気」の愛称で親しまれ<sup>25)</sup>、その後船賃が五銭に上がった後も変わらず「一銭蒸気」と呼ばれ続けた。

田中末芳によれば、東京において初めて水上バスの定期航路が浅草から両国間に開かれたのは1885(明治18)年で、航路はやがて永代橋にまで延長された。当時は隅田川の橋が少なく、陸上の交通手段も未発達であったため、隅田川の東岸と西岸を結ぶジグザグの航路が設定されていた<sup>26)</sup>。

1932(昭和7)年1月15日の『日乗』にも、「晡時中洲に往く、帰途乗合汽船にて千住大橋に至り、歩みて荒川放水路の長橋を渡る、日既に暮れて宵の明星熒々として水心に浮ぶを見る、半輪の月また中天に懸りたり」というように、荒川放水路まで出向くのに、千住大橋まで乗合汽船を利用していたことが記されている。

更に、1932(昭和7)年4月15日の『日乗』では、「晡時中洲病院に往きて菓を求む。夕飯時まで二時間ばかり、雨中の事とて散歩すべき処もなければ、新大橋より船に乗り吾妻橋に至り、松屋百貨店<sup>27)</sup>の樓上を歩む。三階は東武鉄道の停車場なり。窓より隅田川を見おろすに鉄道の鉄橋花川戸より源森川の岸に架せられたれば、今はむかしの枕橋も高架線路の下になりて見えぬ。隅田川の川幅も吾妻橋のあたりは余程狭くなりたるやうなり」と書かれている。浅草の松屋デパートが開店したのは、震災後、東京復興のさなかの1931(昭和6)年である。

---

速な変貌を表現したのであろう。浅草も浅草オペラ全盛の大正中期には、ベラゴロと呼ばれる熱狂的なファンを多く集めて繁栄をきわめたのだが、関東大震災以後はそれも全くすたれた。そして、そのあとはチャンバラ映画、エロ・レビューの街となって、新宿がそれにとって変わる娯楽街となったのである。」

24) 1869年12月5日(明治2年11月3日)に、初代古屋徳兵衛が横浜石川町にて「鶴屋呉服店」を創業したのが始まりである。1899(明治32)年、東京神田今川橋の松屋呉服店(1776(安永5)年創業)を買収し東京へ進出。1903(明治36)年合名会社松屋呉服店となる。

25) 田中末芳(1988)「水上バスと隅田川」新都市42(9)、都市計画協会編、p.86。その後第二次大戦による船の徴用、空襲により水上バスは壊滅状態に陥ったが、1950年には「東京水上バス」として復活した。

26) 太田慧(2014)「東京ウォーターフロントにおける水上バス航路の変遷と運航船舶の多様化」観光科学研究(7)、首都大学東京編、p.38。

27) 東京都中央区銀座三丁目に本店を、台東区花川戸一丁目に浅草店を置く。上述の「鶴屋」「松屋」両呉服店を母体とし、1908(明治41)年、呉服以外に雑貨、洋品の販売を始め、化粧品、帽子の一部を海外より直接輸入して販売するようになり発展した。1970年代前半のオイルショック以後経営が傾き、銀座と浅草の2店舗体制となる。現在銀座の本店は銀座地区の百貨店において人気、売上ともに銀座三越と首位の座を争っている。



また同年、それまで隅田川の東、業平橋止まりだった東武鉄道が路線を延長させ、浅草松屋の3階をターミナル駅にした。それまで東京市の周縁を始終駅にしていた私鉄が、市中に乗入れするようになった<sup>28)</sup>私鉄の歴史の中での画期的事件であった。

1934(昭和9)年2月16日には再び松屋デパートの屋上に上り、隅田川沿いの風景を眺め、その帰りに銀座に出るために地下鉄に乗っている。荷風が地下鉄に乗ったのはこのときが最初である<sup>29)</sup>。

『日乗』1931(昭和6)年12月11日を見ればわかるように、荷風は中洲病院の帰り、新大橋からこの蒸気船に乗って吾妻橋まで行き、そこで降りて浅草の町を歩いている。1932(昭和7)年4月15日の浅草行きも同様である。

更にこの年の5月23日、「新大橋より乗合船にて吾妻橋に至る。其途上両国橋掛替工事既に終りたるを見る。新橋は鉄骨橋上に聳えざるを以て形大に好し」。隅田川を走る船から、震災復興のシンボル橋として完成しつつある両国橋(開橋は1932(昭和7)年11月)を見て、そのデザインが気に入ったと言い、その一週間後にまた蒸気船に乗っている。5月20日、「午後中洲病院に往き、乗合汽船にて吾妻橋に至り河端の公園を歩み(略)」隅田川を昔ながらの蒸汽船に乗って遡ってゆく。

荷風が浅草に足繁く通うようになるのは昭和11(1936)年に入ってからで、玉の井行きと平行しており、この年の春頃から『日乗』の中に「浅草」が目立つようになっている<sup>30)</sup>。その点について、本来荷風の『日乗』における浅草の記述はいつの時点からあったのか、1918(大正7)年8月8日の以下の記述を見てみたい。この年は、『日乗』が書き始められた翌年である。

筆持つに懶(ものう)し。屋後の土蔵を掃除す。貴重なる家具什器は既に母上大方西大久保なる威三郎方へ運び去られし後なれば、残りたるはがらくた道具のみならむと日頃思ひるたしに、此日土蔵の床の揚板をはがし見るに、床下の殊更に奥深き片隅に炭俵屑籠などに包みたるものあまたあり。開き見れば先考の往年上海より携へ帰られし陶器文具の類なり。之に依って竊に思見れば、母上は先人遺愛の物を余に与ることを快しとせず、この床下に隠し置かれしものなるべし。果して然らば余は最早やこの旧宅を守るべき必要もなし。再

28) 前掲、川本『荷風と東京〈下〉—『断腸亭日乗』私註』p.196.

29) この日の『日乗』の記述は以下の通り。「午後浅草に往き松屋百貨店の屋上に登る。人のはなしに晴れたる日には鴻の台の森もよく見ゆる由なれど、余のこゝに来る時は空いつもくもりて近く亀井戸あたりかと思はるゝガスタンクさへ朦朧として影の如し。此日も空には雲多く煤烟濛濛として眺望を恣にすること能はず。隅田川の水も鐘ヶ淵あたりより川上は物に遮られたり。五時過雷門に出で始めて地下鉄道に乗り銀座尾張町に至る」。

30) 前掲、川本『荷風と東京〈下〉—『断腸亭日乗』私註』p.198.

び築地か浅草か、いづこにてもよし、親戚縁者の人々に顔を見られぬ陋巷に引移るにしかず。嗚呼余は幾たびか此の旧宅をわが終焉の地と定めしかど、遂に長く留まること能はず。悲しむべきことなり。

母恒や弟の威三郎との確執、ならびに荷風の父久一郎が1913(大正3)年正月2日に亡くなり、父の邸宅を売らなければならなくなった荷風のやり場のない心境が綴られている。特に注目すべきことは、傷心の極致にある荷風が、「築地か浅草」という陋巷の地を「引移」りたい場所として挙げている点である。実際にも、荷風は大正7(1918)年末、余丁町の旧宅を売却し、築地本願寺裏の築地2丁目の路地裏の家に移り住んでいる<sup>31)</sup>。

荷風は浅草に1935(昭和10)年から足繁く通い出し、翌年の昭和11年には更に頻繁に繰り出すようになっている。この間の『日乗』には、その様子がどのように描かれているだろうか。

1935(昭和10)年の荷風の浅草逍遥の多くは百合子<sup>32)</sup>を伴ったものである。10月23日「午後百合子来る。俱に浅草公園に往き」、11月6日「晴。風なし。百合子西の市を見たしといふ。(中略)立寄りて一酌し、浅草公園を歩み、自働車にて帰宅す。」この夜には「明星晩餐会ありしが往かず。」大晦日には、「夜百合子と相携へて銀座通歳晩の夜肆を見、また浅草仲店を歩む。」とある。

荷風の言う「仲店」とは仲見世のことである。徳川家康の江戸開府以後、江戸の人口ならびに浅草寺への参拝客数の急増により、浅草寺境内の掃除の賦役を課せられていた人々に境内や参道上における出店営業の特権が与えられた。これが浅草寺の仲見世の始まりである。

江戸時代には、伝法院<sup>33)</sup>から仁王門寄りの店を役店(やくだな)と呼び、20件の水茶屋

31) 荷風の住まいは、麻布の「偏奇館」、牛込余丁町の「断腸亭」、小石川金富町の生家荷風などが有名であるが、築地界隈の路地裏に三度居を構えたことはあまり知られていないようである。荷風は大正4(1915)年5月、新宿区余丁町の亡父の家から京橋区築地1丁目6番地(現在の築地2丁目7)の借家に移った。2階は10畳、6畳、3畳で家賃は26円、奥隣りに清元の師匠である梅吉の住居があった。同年9月には離婚した芸者八重次(後の藤蔭静樹)と再び同居すべく宗十郎町9番地(現在の銀座7丁目5)に居を移す。次は大正6(1918)年9月、余丁町の家から木挽町9丁目(現在の銀座7丁目15-18)の路地の2階家に移り、そこを「無用庵」と名付けた。中洲病院の大石医師の往診を受けやすいというのが借家の理由で、この頃から『日乗』を書き始めている。

32) 吉野俊彦(1999)『「断腸亭」の経済学』NHK出版、p.95-98。百合子の本名は伊藤智子である。陸軍のエリート将校本間雅春(後陸軍中将、太平洋戦争中のパターン死の行進の責任者として戦後処刑された)と結婚したが、離婚してからは自由奔放な生活を送った。荷風とつき合い別れてから舞台美術家の伊藤熹朔と結婚したが、数年後に離婚、1925(昭和10)年にはPCL女優として成瀬巳喜男監督の下で製作された「妻よ薔薇のように」の主演女優として活躍するも、1974(昭和49)年に睡眠薬自殺した。

33) 浅草寺の本坊。1777(安永6)年建築の客殿・玄関や1971(明治4)年築の大書院、浅草寺貫首(かんす)大僧

が並んだ。また、雷門寄りは平店(ひらみせ)と呼び、玩具や菓子、土産品などを売り、日本最大の門前町へと発展していった。

だが、明治維新で寺社の所領が政府に没収され、浅草寺境内も東京府の管轄となり、公園法の制定により以前からの一切の特権が仲見世から取り上げられた。しかし1885(明治18)年5月、東京府が仲見世全店の取り払いを命じた後、煉瓦造りの洋風の新店舗が同年の12月に完成し、近代の仲見世が誕生したのである。

1936(昭和11)年4月5日には、「晚餐の後月よければ浅草に行き、言問橋をわたり、白同年7月5日、「哺下<sup>34</sup>浅草公園に往き鳥屋金田<sup>35</sup>に飮す」。

8月21日、「夜浅草公園散歩」。「晴れて暑きこと昨日の如し。晩食の後月よければ髯明神の縁日を見歩き、地下鉄道にてかへる」とある。浅草に往かむと電車に乗る。空いつの間にかくもりて風吹出で、電灯忽消ると共に電光物凄く、腺雨浦然たり。松屋百貨店に入りて雨の晴るゝを待つ。容易に晴れず。地下鉄道にて新橋に至り金兵衛に憩ふ」<sup>36</sup>。

9月4日、「電車にて浅草雷門に至る。途中疾風俄に砂塵を捲き驟雨来る」

「夜浅草公園活動小屋の絵看板を見歩き、千束町を過ぎ、吉原遊廓を歩む」(1936(昭和11)年5月11日)。「灯刻尾張町に飮し、電車にて浅草を過ぎ玉の井に往く」(同年5月20日)。「溼東綺譚」の冒頭で、「わたくし」は六区<sup>37</sup>の興行街を歩いた後、喧騒を避けるように、浅草公園裏の日本堤の裏通りへと足を向けている。

---

正のお居間などがあり、「伝法院」はこれらの総称。もとは観音院、智楽院などと称したが、元禄(1688~1704)以後この名が付けられた。客殿に阿弥陀三尊を祀り、その左右に徳川歴代將軍のうち歴代11名の位牌及び浅草寺各世代住職の位牌を安置する。回向道場として追善法要や、伝教大師忌の「山家会(さんげえ)」や天台大師忌の「天台会」などの論義法要が行われ、修行道場でもある。約3,700坪の庭園は、寛永年間(1624~44)小堀遠州により作庭されたと伝えられる「廻遊式庭園」である。庭園は毎年3月から5月に一般公開される。

34) 午後4時過ぎ。申の刻のこと。

35) 浅草の有名な鳥料理の店である。久保田万太郎の以下の評がある。「金田は、同じ鳥屋ながら、料理は拵へず、鍋で喰はせるばかりのうちである。先代の主人は黙阿弥と親交のあつた人だつたさうだが、さういふ人の経営したところだけ、間どもよし、掃除もつねに行届き、女中も十四五から十七八どまりの、始終襷をかけた、愛想のいゝ、小気のきいたものばかりを揃へてある。諸事、器用で、手綺麗なのが、われ／＼には心もちがよい。」

36) ここでは、地下鉄の利用が次第に日常化してきているのがわかる。

37) 関東大震災による焼失で致命的な損害を受ける以前、明治・大正期の浅草は、その劇場・演目数と規模において文字通り日本一の興行街としてその名を誇った。当時、浅草の興行は興行指定地域「六区」を中心とし、そこに劇場、寄席、活動写真館、そして観物場などの興行施設が林立したが、中でも現在存在しない「観物場」は明治・大正期の浅草の興行を特徴付ける存在である。実際には、浅草の興行物の大半がこの観物場で行われており、特に大正期のオペラ運動の一翼を担った浅草オペラの場合、その常設興行の殆どがこの観物場で行われていた。

尚、荷風の言う「浅草公園」は、その多くが旧浅草公園六区画中の第六区に該当する「浅草公園六区」を指している。即ち台東区、浅草寺南西側の映画館・演芸場等がある娯楽街の通称である。明治新政府が欧米諸国の先進国に習い東京の公園造成を計画した結果、明治4年に浅草寺境内が公収され、1873(明治6)年1月15日の「公園設立に関する大政官布告」に基づいて同年3月25日に浅草寺、寛永寺、増上寺、富岡八幡、飛鳥山が公園としての整備を開始した。これらが現在の恩賜公園になっている。

浅草寺にも境内に公園が設けられたが、境内が狭かったため浅草寺の火除け地の田圃を埋め立て、1883(明治16)年の工事終了と同時に、境内の西側にあった池と新しく出来た池とを挟んで新たに造成地ができ、そこに興業街が誕生した<sup>38)</sup>。

浅草は別名「銘酒屋」と呼ばれる売春宿が隆盛を極めた場所である。1917(大正6)年の時期には、飲酒店を装いながら私娼を抱え、店裏で売春を斡旋する銘酒屋が東京市内で約1,200軒を超えていた。その半数以上が、浅草公園の「十二階下」一帯にあったとされる。明治末期から警察はその取り締まりを強化し、銘酒屋の一を亀戸、玉の井へと移転した。特に、関東大震災(1923)でこれらの銘酒屋街は壊滅的な打撃を受け、悉く玉の井へと移動を余儀なくされる。上の川本の言及は、浅草の「銘酒屋」が湊東、玉の井に移転した後のことを指している。

持田叙子<sup>39)</sup>は、1937(昭和12)年『湊東綺譚』が書かれた時期と前後し、荷風が玉の井の私娼窟や浅草六区などの猥雑な街角に通った理由について、1949(昭和24)年の『裸体』、1954(昭和29)年の『吾妻橋』の執筆に関連し、新しい女性の勃興とその風俗をウォッチングしていたとする<sup>40)</sup>。同様に柳沢孝子も、「1936(昭和11)年以降の玉の井通いからは、いうまでもなく『湊東綺譚』(1937(昭和12)年4月)が生まれ」と言い、日記中に頻繁に記される聞き書きは、娼婦の経歴から戦時下の噂話まで多岐にわたると述べている<sup>41)</sup>。

秋庭太郎は『新考永井荷風』(春陽堂、1983(昭和58)年)の中で、「(荷風は1936

38) 浅草公園は六つの区画に分けられ、一区は 観音堂とその周辺、二区は仲見世周辺、三区は伝法院とその周辺、四区は二つの池を含む周辺、五区は奥山、花やしき一帯、六区は埋め立て地に出来た興業街と定められた。

39) 慶応義塾大学大学院修士課程修了、国学院大学大学院博士課程単位取得退学。日本の近代文学研究者である。1995年より2000年まで『折口信夫全集』(中央公論社)の編集に携わる。2008年2~4月に世田谷文学館にて開催された「永井荷風のシングル・シンプルライフ」展の監修を務めた。

40) (2009) 「永井荷風没後50年「浅草ロック」元踊り子が語ったストリップ劇場の「荷風先生」」週刊新潮 54(19)、p.43.

41) 柳沢孝子(1996)「永井荷風『断腸亭日乗』—その多重性」国文学解釈と教材の研究41(2)、学灯社、p.69.

(昭和11年)の9月初めまでに4、5回ほど玉の井に出遊してみたもの、未だこの色里を背景とした小説をつくる意図はなかつたらしく、寧ろ当時荷風の意図してみたところは吉原を含む浅草小説を書くべく企画してみた(以下略)」と述べた。つまり、荷風は玉の井のことよりも浅草のことをまず先に書きたかったと言っている。川本はその逆で、つまり砂町、荒川放水路を中心とする城東へ散策の帰路に玉の井という色里が立ち現われ、そこに足を運ぶようになってから出入口に当たる浅草に関心を持つようになったとする<sup>42)</sup>。要は川本は、荷風にとって浅草は玉の井をはじめとする墨東への起終点として従属的にあるとしている<sup>43)</sup>。

所謂「浅草が先か、玉の井が先か」という問題を考察する上で、荷風が浅草を書こうとする意志がどの時点から明確になったかという点について考えてみたい。例えば、1936(昭和11年)9月13日の『日乗』には、「晩飯すまして後隅田公園に往く。震災後変り果てたる浅草の町を材料となし一篇の小説をつくりたしと思ふなり。言問橋をわたり秋葉裏の色町を歩み玉の井に至り」とある。

これに関して秋庭太郎は、荷風の本格的な浅草通いは1937(昭和12)年の暮れ頃からとしているが、川本は「玉の井への出入口としての浅草」という前提に立ち、荷風の浅草へのこだわりは既に(『墨東綺譚』執筆時の)前年の昭和11年頃から始まっているとする。このように、秋庭説と川本説では荷風の「意味を持つ」浅草通いが始まった時の特定に一年の違いが見られる<sup>44)</sup>。一方、秋庭説を受けた野口富士男は『わが荷風』の中で、荷風の浅草通いの起点を1937(昭和12)年11月15日にしている。しかし何れにせよ、荷風が浅草を題材とした小説を書こうとしたことに変わりはない。ならば彼において浅草とはどんな意味を持つものであろうか。

先にも述べたように<sup>45)</sup>、『日乗』は創作の部分が多いと言われ、遠藤周作も創作説の

42) また、川本は前掲書(p.201)において、「もし、はじめから荷風が玉の井より浅草を舞台にした小説を書こうとしていたのなら、ここで唐突に「浅草の町を材料となし一篇の小説をつくりたしと思ふなり」とは言わないだろう。玉の井通いをしていながら、その起点となる浅草を知るようになり、玉の井のことだけでなく、浅草のことも書きたくなった。

『日乗』を追ってゆけば、そう考えるほうが自然に思える。」と述べている。

43) 川本は、「まずはじめに墨東があり、そこに行き来しているうちに、出入口、起終点としての浅草が浮かび上がってきた。それまで、浅草オベア時代も、カジノ・フォーリー時代もほとんど浅草に興味を示さなかった荷風が、昭和十一年ころ、玉の井通いをするようになってから急に浅草を意識するようになったのは、そのためである。(中略)普通なら、浅草が主で玉の井が従になる。しかし、荷風にとっては、玉の井こそが主で浅草が従になった。」と述べている。

44) 秋庭が荷風の浅草通いの起点を1937(昭和12)年の暮れ頃としているのは、『日乗』1938(昭和13)年11月4日の「思返せば浅草公園の興行物に興味を覚えめしは、去年の十一月初にて、早くも満一年とはなれるなり」という記述によるものであろうが、『日乗』にはその前段階の浅草への着目が綴られている。

45) 今西英造(2000)「『断腸亭日乗』を読む(三) 荷風と「時代」」史(103)、現代史懇話会編、p.41。「米・仏滞在中の日常記録は真実としても、娼婦のイデスとの濃密な交情の話など、いかにも作りものであるような気がす

立場をとった46)。だが、『日乗』の場合、創作・虚構性を強調したとしても、「畢竟、『日乗』は実録性を宗とする日記なのだ。」47)と塚本康彦が言うように、創作的な面は皆無ではないにせよ、『日乗』の言葉の背後に、荷風のみが深く抱く真実の情が存在するのは紛れもない事実である。

例えば、昭和16(1941)年の2月4日の『日乗』には、浅草のオペラ館の踊り子たちと森永に行き、夕食を済ませた時のことが書かれている。楽屋に至る朝鮮の踊り子の一座が日本の流行歌を歌っていた。声に一種の哀愁が感じられ、朝鮮語の民謡を歌えばいいのにと彼等に伝え、公開の場所で朝鮮語を用いたり民謡を歌ったりすることは厳禁されていると答え、それに対して憤慨する様子も見えなかったとある。

荷風はこの時のことを、「余は言ひがたき悲痛の感に打たれざるを得ざりき。」と言い、次に、「彼国の王は東京に幽閉せられて再び其国にかへるの機会なく、其国民は」48)、「祖先伝来の言語歌謡を禁止せらる。悲しむべきの限りにあらずや。余は日本人の海外発展に対して歓喜の情を催すこと能はず。寧嫌悪と恐怖とを感じてやまざるなり。」49)と綴っている。この過激な一文は紛れもなく、日本の朝鮮植民地支配に対する荷風の抗議の意思と見てよい50)。尚且つ、「余曾て米国に在りし時米国人はキューバ島の民の其国の言語を使用し其民謡を歌ふことを禁ぜざりき事を聞きぬ」「余は自由の国に永遠の光栄との在らむことを願ふものなり。」51)という修辭的な言い回しは、実際に日本の敗戦を望むということに他ならない。更に、1943(昭和18)年1月19日の『日乗』でも、「午後浅草に行」

る。小門勝二氏の「永井荷風の生涯」、野口富士男氏の「わが荷風」も彼女を架空の人物と見ている。」

46) 遠藤周作(1985)「『荷風ふし』について」『新潟日本文学アルバム・永井荷風』新潮社、p.26.その中で遠藤は、「『断腸亭日乗』は日記ではなく日記文学なのである。」と述べている。

47) 塚本康彦(1989)「『断腸亭日乗』における反体制的言辞」中央大学団学部紀要(130)、中央大学文学部編、p.74.

48) 河盛好蔵(1963)「『断腸亭日乗』について—文学空談(一)—」文学界17(6)、文芸春秋、p.105. 中央公論社版では「韓国は既に亡びて存在せず其民族」というふうに訂正された。

49) 小野田求(2002)「永井荷風日記『断腸亭日乗』論—日本の朝鮮植民地支配問題に関する記述の分析を中心にして—」大阪外国語大学論集(26)、大阪外国語大学編、p.9.修正を加える前の『日乗』では、この日の最後までは以下のようになっている。「韓国の名は既に亡びて存せず其民族は祖先伝来の言語歌謡を禁ぜらる。悲しむべきの限りならずや。余曾て米国に在りし時、米政府はキューバの民が其国の言語を使用し其民謡を歌ふことを禁ぜざりしと聞けり。自由の国に永遠の光栄を在らむことを。」

50) 前掲、河盛「『断腸亭日乗』について—文学空談(一)—」p.105. この部分は中央公論社版では削除された。

51) 前にも荷風は、関東大震災の1ヶ月後に、「1923(大正12)・10・3 帝都荒廢の光景哀れといふも愚なり。されどつらつら明治以降大正現代の帝都を見れば、所謂山師の玄関に異ならず。灰塵になりしとて惜しむに及ばず。近年世間一般著修驕慢、貧欲飽くことを知らざりし有様を顧れば、この度の災禍は実に天罰なりしと調ふ可し。何ぞ深く悲しむに及ばむや。外觀のみを修飾して百年の計をなさざる国家の末路は即此の如し。自業自得天罰觀面といふべきのみ」と言った。

き、「侵害の独逸軍甚振はず。また北阿遠征の米軍地中海より伊国をおびやかしつつありと。願わくばこの流言真実ならんことを」と願うほど<sup>52)</sup>、日本の軍部に対しては非常な反感を抱いていた。以上は、浅草を舞台に荷風の感情が激出した部分である。

それでは、このような荷風にとっての浅草とは、一体如何なるものであったのだろうか。荷風から見た浅草は「幻影の町」<sup>53)</sup>であり、「消閑の場所として山手育ちの彼の心に住みついたのは、銀座や新宿ではなく」、「下町情緒豊かな浅草」<sup>54)</sup>で、「死ぬ一、二ヶ月前は毎日出かけ」<sup>55)</sup>た特別な意味を持つ場所である。「(オペラ館の演技が)丸の内にて不快に思はるるものも浅草に來りて無智の群集と共にこれを見れば一味の哀愁をおぼえてよし。」(『日乗』1937(昭和12)年11月16日)。「江戸情緒が僅かながらもただよう浅草に惹きつけられ」<sup>56)</sup>、「浅草のオペラ館に毎日のように通ったのも、(中略)銀座、新宿に比べて、庶民の息吹があふれるここに惹きつけられた」<sup>57)</sup>からであった。

1941(昭和16)年12月11日「日米開戦以来世の中火の消えたるやうに物静なり。浅草辺の様子いかならむと午後に往きて見」るに、「六区の人出平日と変わりなくオペラ館芸人踊子の雑談亦平日の如く、不平もなく感激もなく無事平安なり」。更に、「余が如き不平家の眼より見れば浅草の人達は亮舜の民の如し。」という最大の賛辞をこの浅草の地の民に贈っている。

1943(昭和18)年10月6日にも、「三ノ輪輪行の電車に乗り合羽橋より浅草公園に至りオペラ館楽屋に憩ふ。このみはいつ来て見ても依然として別天地なり」と言い、翌年2月11日「稿を脱す。添冊暁の四時に至る。数年来浅草公園六区を背景として一編を草せんと思居(ママ)ひもたりし宿望、今夜始めて遂ぐるを得たり。」これが即ち、『溼東綺譚』以来最高の作品と諸家から絶賛された『踊子』完成の瞬間であった<sup>58)</sup>。

玉の井を舞台とした『溼東綺譚』で描き出されたのは、懐旧の念に彩られた荷風の目を通して「観察」された人間や町の姿であった。だがそれは実際に感じられる感覚とは異なったものである。例えば、「溝の汚さと、蚊の鳴声とはわたくしの感覚を著しく刺戟し、三十四年むかしに消え去った過去の幻影を再現させてくれるのである。」という鼻を衝く「し尿」の

52) 枢軸国側が負け、連合国側が勝利することを望む『日乗』の言葉はこの他にも頻出している。

53) 田村隆一(1974)「『断腸亭日乗』と日本の近代化」現代詩手帖17(6), p.39.

54) 今西英造(2002)「『断腸亭日乗』を読む(三)荷風と「時代」」史(108), 現代史懇話会編, p.31.

55) 掲論、田村前(1974)「『断腸亭日乗』と日本の近代化」p.39.

56) 掲論、今西前(2002)「『断腸亭日乗』を読む(三)荷風と「時代」」p.32.

57) 同上

58) だが、『踊子』が発表されたのは戦後の1946(昭和21)年であった。

臭気も、どぶの汚さも、前後を読む者が感じ取る感覚は感覚器官を通じたそれとは全く違ってくる。『溼東綺譚』においては、格調高い文体が奏でるところの幻想性を生み出す仕掛けが到るところに張り巡らされているからである。

この点、柳沢孝子も、「『断腸亭日乗』は、つまるところ、ある超俗的な作家の「独居淒涼の生涯」の記という圧倒的な印象を与える作品と前置きした上で、最大のものはやはり文体であると述べている<sup>59)</sup>。

しかし、浅草を舞台とする『踊子』においてはそういう技巧を駆使する必要がなかった。浅草古来からの宗教的な立ち位置<sup>60)</sup>と歴史性、ならびに浅草の構造が、明らかにそれ自体をして特異な幻影的空間たらしめていたからである。浅草を舞台とする『踊子』の文章が、『溼東綺譚』のそれより没技巧的とされるのはこの点から見ても理解できよう。例えば、川端康成が『浅草紅団』で書いている浅草について、以下の部分を見てみたい。

浅草は万人の浅草である。浅草には、あらゆるものが生のままふりだされている。人間のいろんな欲望が、裸のまま踊っている。あらゆる階級、人種をごった混ぜにした大きな流れ。明けても暮れても果てしない、底知れない流れである。浅草は生きてゐる<sup>61)</sup>。

上の引用は、「浅草もの」と呼ばれる不良少年少女を題材にした短中編の代表作『浅草紅団』からであり、1929(昭和4)年12月から翌年2月26日の間、東京朝日新聞の夕刊に掲載された<sup>62)</sup>。

この引用文を荷風の描写と比較した場合、文語と口語という文体の差はともかく、川端の方がより躍動的に感じられるのは、浅草を生命体のように扱っているからである。だが、浅草を描く時の心境として、荷風の筆が殊更抑制的であったとは思われない。『踊子』の表現上の恬淡さは、先にも述べたように、幻影的世界の創造を重視する荷風の創作的姿勢が、浅草を表現する際に作為性を殆ど必要としなかった点に起因するからである。

59) 柳沢孝子(1996)「永井荷風『断腸亭日乗』」国文学 解釈と教材の研究 41(2), 学灯社, p.68.

60) 浅草寺の草創は推古天皇36年即ち628年で、古事記や日本書紀よりも時代を遡る。徳川家康が入府すると浅草寺は徳川家の祈願寺となり、次いで1618(元和4)年に家康を祀る東照宮が境内に建立されてからは名実共に徳川将軍家の尊崇を受ける大寺となった。庶民による観音信仰は江戸時代から尚も健在である。

61) 伊藤経一(2002)『大正・昭和初期の浅草芸能』文芸社, p.93. 出処は、川端康成(1929)「水族館」『浅草紅団』東京朝日新聞。この部分は演歌師で詩人の添田唾蟬坊の言葉を引用したものである。

62) 尚、1945(昭和20)年11月14日の『日乗』には、雨の降りしきる中、午後に川端がやって来て、荷風が溼東綺譚及びつゆのあとさきを出版したお祝い金1万円を渡したことが書かれている。そして、「蓋し初版の印税なりと云、深更風雨」と締め括っている。



## 5. 終わりに

篤学で誠実な人柄を持つ父久一郎への感謝と憧憬は、その残像を懐古すべき荷風の『日乗』執筆の大きな契機となった。もとより荷風は、館柳湾、大田南畝、成島柳北らに関心を抱いていたが、数多の漢詩文を渉獵して考証の筆を起し、『葦斎漫筆』、「太田南畝年譜」、「成島柳北の日記について」、「柳北仙史の柳橋新誌につきて」などの稿が生み出されていった<sup>63)</sup>。

荷風にとって江戸の文学特に漢文世界は、文字の世界においてのみ回帰が可能な世界であり、荷風の探墓行脚とは紛れもなく、漢文学ひいては朝鮮儒学を受容し発展した江戸儒学を中心とする情緒へのノスタルジーであったと考えられる。

次に、浅草は早くから文化圏の発生した都市であるが、その大きな要因は浅草寺の建立にあった。浅草の歴史で特筆すべきは、江戸時代に浅草寺境内とその周りが盛り場化する一方で、周囲に遊郭吉原と芝居町猿若町が移入したことである。1657(明暦3)年の大火を機に、日本橋側の隅田川畔にあった傾城の吉原は幕府により浅草日本堤への移転を命じられている。また、1842(天保13)年遊郭の近くに誕生した猿若町は、天保の改革の風俗取り締まりにより江戸歌舞伎の劇場三座(中村座＝葺屋町、市村座＝堺町、河原崎座＝木挽町)が浅草寺裏に強制移転してできたものである。

1873(明治6)年には新政府による公園設置の通達を受け、東京府は浅草寺境内に浅草公園を造成し、それは1884(明治17)年に便宜上六つの区域に分けられた。六区の造成が完了すると、西洋的な公園の設置を目指す東京府は五区の見せ物空間をそっくり六区に移すことにした。これにより六区に興行が集中し、五区に代わって浅草娯楽街の中心となる。結局、浅草の興行地は、記・紀の編纂以前に建立された浅草寺という一大宗教施設の膝下にあって、尚且つ、芸能と風俗とが分離せず様々な文化的要素を醸し出す「重層の異界」と言うべきものであったのである。

また、浅草では江戸時代から高所高覧が人気を博した。庶民をして浅草寺五重塔(江戸初期建立)の修理用の足場に上がらせて下を展望させ、料金一銭を徴収した計画が大当たりしたことをきっかけに明治の時代でも浅草六区に高所高覧ブームが起きたのである。1877(明治20)年に富士(人造)縦覧場が開場し、更にそのパノラマ館の開場から半年遅れ凌雲閣の別称十二階が開業した。ここの展望台からは千葉県、埼玉県、武蔵野の一

63) 「向嶋」、「上野」、「礪川徜徉記」がそれである。

帯から神奈川県まで見渡せた。興行的観点での現在のスカイツリーの如きタワー構想の原型が既に存在していたのである。この高所高覧ブームの端緒が浅草寺であったというのも興味深い。

凌雲閣の周囲には子供相手の玩具や土産を売る露店が並んでいたが、実はその一角に、吉原とは別の「悪所」空間があった。それは、東京市中に散在していた銘酒屋を1887(明治30)年頃に集めてできたものであるが、通称「十二階下」と呼ばれ、「魔窟」とも言われた。魔窟とは魔界への入り口である。凌雲閣は浅草のランドマーク的存在であり、その近辺に別個に売春施設が位置することは珍しくないが、この場合はすぐ真下に存在していた。最大集客数を誇る象徴的な建物がタワー型で、その中の娯楽空間と「魔窟」と呼ばれる空間とが上下の重層構造にあったということは、浅草の魔界性ならびに荷風の浅草への回帰性を理解する上で特に大きな意味を持つものである。

林鐘碩は、川端の『千羽鶴』の栗原ちか子の胸の痣から生え出でる毛を「男性性の象徴」と述べた<sup>64)</sup>。痣の真上に伸びて行く毛は男性の性の象徴である。痣を持つちか子の胸から流れ出る乳を飲んで育つ子供とは、痣が象徴する魔窟から流れ出る性の幻影を食わずしては生存できない男性を指す。菊治には、ちか子の乳を飲んで育つ子供は全て「悪魔の恐ろしさをもっていそうに」思われてならない。だが、菊治こそ紛れもなく、そうしたちか子の子供に違いなかったのである。

一方で、当時の玉の井は、大正時代に開けたばかりで未開の野原が続く最下の場末と言っても過言ではなかった。『溼東綺譚』の文章によれば、1918年頃、浅草観音堂裏手に広い道路が作られた際、そのあたりに数多くあった「楊弓場銘酒屋のたぐひ」が、尽く取り払いを命じられ、玉の井の大正道路沿いに店を移したのが始まりとある。

荷風がしばし玉の井に通うようになったのは『溼東綺譚』の執筆が最大の理由である。銘酒屋に限って言うならば元来浅草が玉の井の母体であった。父親の死の悲しみにおいて、その邸宅売却の際に浅草に移り住みたいと願った荷風である。その荷風において、浅草の一部がそっくりそのまま移った玉の井に向かうのは至極自然な成り行きでもあった。

荷風は玉の井を舞台とした『溼東綺譚』で夢に揺蕩う彼岸の里を描いたのだが、その理想の実現は文学上でしか叶える術がなく、それでも幻影の彼方の彼岸理想を捨てられず最後に辿り着いたのが浅草であった。荷風の『日乗』が浅草より出でて浅草に帰ると言われるのもこうした理由からであろう。

64) 林鐘碩(2005)「川端康成小説のモチーフ」『日本文化学報』第24輯, 韓国日本文化学会, p.235.

この点はまた、荷風が玉の井を舞台とする『墨東綺譚』を書いた後、浅草を舞台とした小説を再び書かなければならなかった必然性でもある。『日乗』に描かれた浅草は、その必然性が形成されていく過程を示すものであり、その意味で非常に価値のある資料であると言える。

## 【参考文献】

- 赤瀬雅子(1992)「荷風の批判精神—『断腸亭日乗』にみる韓国観を中心として」総合研究所紀要 18(1), 桃山学院大学紀要, p.24.
- 伊藤経一(2002)『大正・昭和初期の浅草芸能』文芸社, p.93.
- 今西英造(2000)「『断腸亭日乗』を読む(三)荷風と「時代」」史(103), 現代史懇話会編, p.41.
- (2002)「『断腸亭日乗』を読む(三)荷風と「時代」」史(109), 現代史懇話会編, pp.31-32.
- 林鐘碩(2005)「川端康成小説のモチーフ」『日本文化学報』第24輯, 韓国日本文化学会, p.235.
- 遠藤周作(1985)「『荷風ふし』について」『新潮日本文学アルバム 永井荷風』(23) 新潮社, p.26.
- 大野茂男(1971)「断腸亭日乗研究(資料編)」千葉大学教養部研究報告A4, 千葉大学編, pp.95-161.
- 小野田求(2002)「永井荷風日記『断腸亭日乗』論—日本の朝鮮植民地支配問題に関する記述の分析を中心にして—」大阪外国語大学論集(26), 大阪外語大学編, p.9.
- 川本三郎(1996)『荷風と東京 <下>—『断腸亭日乗』私註』都市出版, p.194, 196, 198.
- 河盛好蔵(1963)「『断腸亭日乗』について—文学空談(一)」文学界17(6), 文芸春秋, p.105.
- 田中末芳(1988)「水上バスと隅田川」新都市42(9), 都市計画協会編, p.86.
- 塚本康彦(1989)「『断腸亭日乗』における反体制的言辞」中央大学文学部紀要(130), 中央大学文学部編, p.67, 74.
- 永井荷風(1951)『ぼく東綺譚』新潮社, p.6.
- 柳沢孝子(1996)「永井荷風『断腸亭日乗』—その多重性」国文学解釈と教材の研究41(2), 学灯社, pp.68-69.
- 吉野俊彦(1999)『「断腸亭」の経済学』NHK出版, pp.95-98.
- 持田叙子(2009)「永井荷風没後50年「浅草ロック」元踊り子が語ったストリップ劇場の「荷風先生」」週刊新潮54(19), p.43.
- 和田英信(2015)「永井荷風と『下谷叢話』」お茶の水大学中国文学会報(34), お茶の水大学中国文学会編, p.24.
- Cocteau, J. (1936) “*Tour du monde en 80 jours ( mon premier voyage )*”, Gallimard, p.186.

논문 투고 일자 : 2016. 06. 06.

논문 심사 일자 : 2016. 07. 25.

게재 확정 일자 : 2016. 07. 27.

---

 <要旨>
 

---

## 『断腸亭日乗』と江戸浅草

所由美

本論文は、永井荷風の日記『断腸亭日乗』の記述をもとに、江戸浅草が荷風において如何なる意味を持つものであるかという点について考察を試みたものである。浅草は、江戸時代から浅草寺を中心とする仏教信仰の求心地であって、同時に漢文学者ならびに儒学者の足跡の数多く残る江戸の情緒の色濃い場所である。反面そこは江戸時代から吉原を擁する最大の色町であり、銘酒屋と呼ばれる売春宿の多くが玉の井に移転した後も凌雲閣という不夜城を中心として滔々たる魔界の幻影を放ち続けていた。

彼岸理想を追い求めて彷徨した荷風の『日乗』の記述に、玉の井を舞台とする『溼東綺譚』の執筆の後、浅草を舞台とする『踊り子』を何故書かなければならなかったかという創作の動機形成の過程を垣間見ることができる。それは浅草という幻影に搦め取られた一老作家の彷徨の跡であると同時に、そこを彼岸立命の地としたい荷風の意志的選択という二面性を持つものである。

## A study on "Danchotei Nichijo" and Edo Asakusa

Tokoro, Yumi

It has writing of "Bokto-Kitan" for reasons of the maximum that a load style came to go to the well of the ball for a while. If only a brothel fronted with a sham sake shop said, Asakusa was the mother's body of the well of the ball originally. In sorrow of the death of father, it is the load style which wished that I want to move in Asakusa in the case of the residence sale. In a load style, it was the quite natural course that went to the well of the ball which a part of Asakusa moved to in its entirety.

The load style was going to describe the village of the equinoctial week to float rootlessly in a dream in "Bokto-Kitan" which assumed the well of the ball the stage, but there was not the art which granted it only literarily, and it was Asakusa that arrived last without throwing away an ideal on the equinoctial week in the still visionary distance after all. It will be from such a reason that it is said that a load-like "diary" comes over from Asakusa and returns to Asakusa.

After having written "Bokto-Kitan" where a load style assumes the well of the ball the stage again, this point is the inevitability that you had to write the novel which assumed Asakusa the stage again. Asakusa described in "Danchotei Nichijo diary" shows the trace which such an inevitability is formed, and it may be said that "the heart-ripping episode bower diary" is a document having an important meaning at the point.